

R6 年度連続講座「丹波の歴史を災害から守る」(2024/9/14@青垣住民センター)

松下正和 (歴史資料ネットワーク副代表)・井上舞 (神戸大学)

0. はじめに

・丹波の災害史

…『丹波史年表』や『兵庫県災害誌』に詳しいが根拠史料が不明。原史料調査の必要

(例)「神楽川板橋碑」の碑文解説 天保6(1835)神楽川(佐治川)の架橋、築堤

・近年は砂防技術の発達などインフラ整備が進み大規模水害に見舞われる機会は少なくなりつつあるが、一方で温暖化にともなう異常気象(記録的な高温・局地的な大雨・線状降水帯の発生など)や、都市化にともなう流域の浸水・保水機能の低下などで**風水害・土砂災害の頻度はむしろ増加する可能性あり**。(例)平成26年8月丹波市豪雨

・(人の一生) < (大規模災害の周期) …「ここは災害のない良いところだから」という言葉は、単に過去の災害を知らないだけのことが多い。

「【**知ること・備えること・行動すること**】次の災害に備えるためには、災害対策本部も、地域に暮らす・働く・学ぶ人々も、活動する地域は、過去にはどのような災害があったのか、どのような危険が潜んでいるのか、また、それに対してどのような減災・防災計画や行動計画があるのか知っておく必要がある。あわせて、その時に適切な行動ができるように、自らの行動計画(マイハザードマップなど)を作成するとともに、各種の訓練にも参加する必要がある。これらの「知ること」「備えること」が十分にできていると、有事に際し「行動すること」は意味のある適切なものになると考える。また、今回の災害を歴史の1ページに止めることなく、できたこと、できなかったことを後世に語り継ぐことは重要であり、さらに語り継ぐための記録を残すことも極めて重要である。」(『丹波市豪雨災害復興記録誌』兵庫県丹波市、R2、22頁)

1. 歴史資料ネットワーク(略称:史料ネット)について

1) 概要

・1995年の阪神・淡路大震災を契機として設立されたボランティア団体(事務局=神戸大学文学部内、078-803-5565、s-net@lit.kobe-u.ac.jp)

・日本史研究者、文化財担当職員、地域史研究団体などのメンバーとともに被災した古文書や民具類などの歴史資料を保全

・HP <http://siryo-net.jp/>



2) 史料ネットの保全対象=民間所在の未指定文化財 cf.指定文化財は文化財保護法で保護対象

・古文書(崩し字で和紙に書かれたものなど)、古い和本(和紙に書かれ、冊子状のものなど)、近代の古書、ノート、記録(手紙や日記等)、新聞、写真、絵画、古い襖や屏風(下張

りの古文書も含む)、自治会などの団体の記録や資料、農具、機織りや養蚕の道具、古い着物など、物作りや生活のための道具など

・「どこにでもあるけれども、そこにしかないもの」

昔の人の暮らしぶりなど、地域や、家や、個人の歴史を知る手がかりとなるようなものは全て歴史資料として、地域歴史遺産として救出・保全 ※「存在証明」としての記録史料
・レスキューの意義…人々の思い出・記録資料・歴史文化の保全が精神的復興につながる

3) 全国各地に広がる史(資)料ネット組織 現在約 30 団体

・最近できた資料ネット…2024 年 1 月発生能登半島地震を契機に「いしかわ史料ネット」が 3 月に結成

<https://sites.google.com/view/ishikawashiryonet>

(参照)『地域歴史文化継承ガイドブック 付・全国資料ネット総覧』(文学通信)



4) これまでの災害対応 ※今日は主に水害対応の話を中心に

- ・95 年阪神・淡路大震災以来 地震対応 →現在能登半島地震などに対応中
- ・04 年新潟・福井水害以来 水害対応 →先月某県立高校の水損学校資料処置
- ・11 年東日本大震災以来 津波、原子力災害対応 その他焼損文書対応もあり

5) 水濡れ史料対応の課題 ※すべての災害は水害に通じる

- ・カビ、腐敗臭の発生により廃棄されやすい
- ・少量の場合は送風・吸水乾燥、大量の場合は冷凍や真空凍結乾燥(FD)処置の必要
- ・乾燥後も悪臭あり(特に FD 後は有機酸・エステルの値が上昇)、汚泥除去・脱臭のためドライクリーニングや一紙ごとに再度の洗浄が必要

→応急処置できる人材がまだまだ不足!全国各地でワークショップを開催

※水を使わない処置が「応急処置」。水を使う洗浄はもはや「修復」の領域。

→いつでも、どこでも、誰にでもできる、安くて、早くて、簡単な乾燥法を普及する必要
修復の専門家でない私たちにもできることがあります!

皆さんも「史料の救命士」になりませんか?

2. ワークショップ 水で濡れたり泥で汚れた資料の処置 →まずは乾燥!

1) 薄手の資料の乾燥法: キッチンペーパーなど吸水紙での吸水乾燥

- ・最初は「押し法」(史料全体を新聞紙や、吸水紙でサンドイッチして加重)
- ・乾いてきたら「はさみこみ法」(頁の間に吸水紙を挿入して上から加重)

※メリット: 電気がなくても人手だけで可能、デメリット: 大量の場合は不向き

2) 厚手の資料の乾燥法：スクウェルチ・パッキング法

・分厚い帳面類、書籍などは新聞紙にくるみ、バルブ付きの布団圧縮袋・衣類圧縮袋に入れて、掃除機などで脱気。資料と新聞紙を圧着させることで吸水させる。新聞紙は数回交換する必要がある。

※メリット：真空凍結乾燥機などの機械がなくても乾燥可能。常温でも乾燥可能。平滑に乾燥が可能

※デメリット：暑い場所、直射日光のあたる場所に放置するとカビが生えることもあり

3) 汚れた資料のドライクリーニング（水洗いをしない）

・刷毛などで汚れを落としていく

※応急処置の考え方について

「いつ、どこで、誰が、何を、なんのために、どこまで、どのように、いくらで」は人によってさまざま。災害の種類、被災資料の量や被害程度、所蔵者や現場の状況などによって毎回対応は異なり、これといった「正解」はない。むしろ関係者の皆で考え方をすり合わせる中でお互い納得しながら進めていくことの重要性。

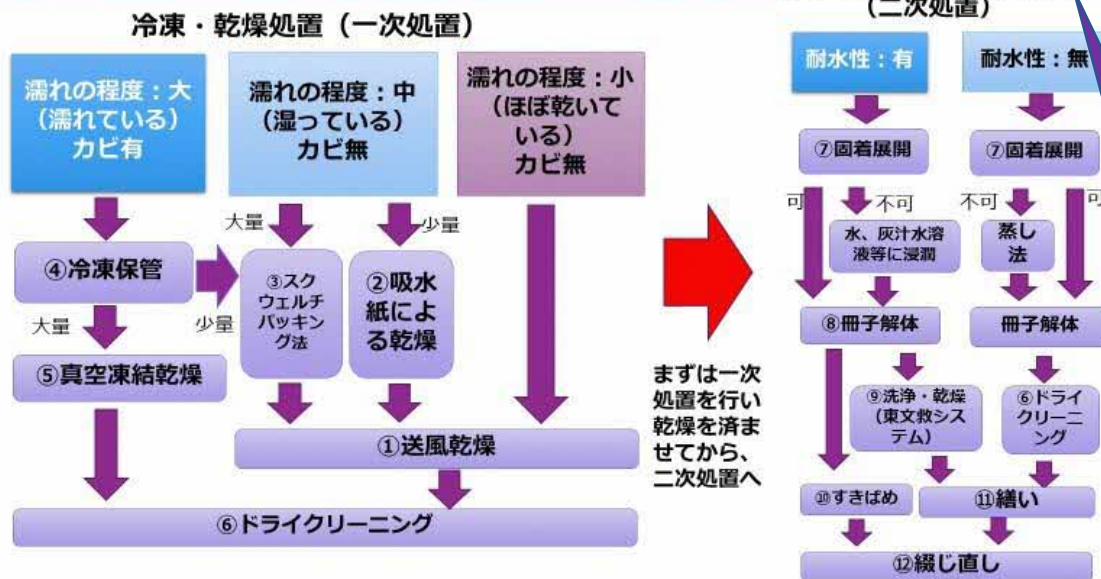
・天野真志・松下正和編『地域歴史文化のまもりかた 災害時の救済方法とその考え方』（文学通信、2024年4月刊行）



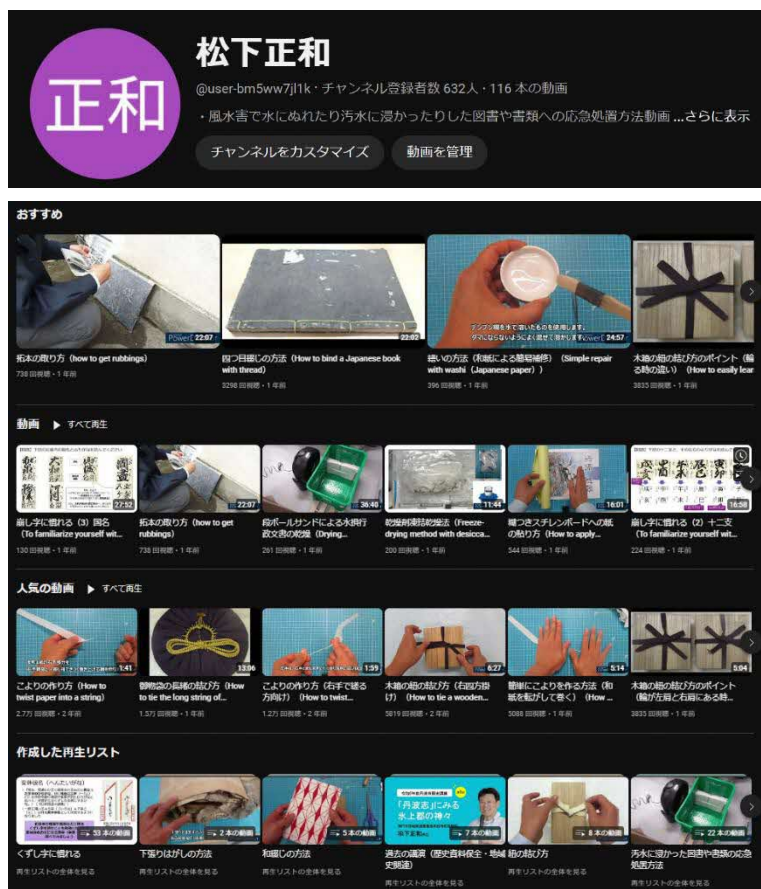
阪神・淡路大震災から東日本大震災を経て現在に至るまで、被災資料救済の対応に関わる救済技術の紹介やマニュアルが多数提示されてきたが、実は被災の状況は地理的状況や災害程度等によって大きく変容し、救済対象となる資料の状態も一様ではない。本書はマニュアルにとどまらない、「考え方」に重点を置き、それぞれの「被災状況」に合った実践活動の手がかりを示す。国際化に対応すべく、英語版も併載。

3. 被災地での実際の処置について ※あくまでも松下の考え方。現場により異なります。

水濡れ資料処置作業手順 (2023年段階松下案)



・松下作成「水濡れ資料の応急処置」動画 動画検索で「松下正和」と入力してください
 <URL> <https://www.youtube.com/channel/UCDSyTZhLWZtgzb0nLUzITqg>



<再生リスト>

「汚水に浸かった図書や書類の応急処置方法」「こよりの作り方と使用方法」「紐の結び方」「和綴じの方法」など

おわりに

- ・濡れてもあきらめずに捨てないで
- ・この簡単な乾燥方法を周知してください
- ・被災時などは一人で悩まず、史料ネットや教育委員会にご連絡ください